

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

<自分の殻>を破ること : 徳田秋聲『仮装人物』論

著者	梅澤 亜由美
出版者	法政大学文学部
雑誌名	法政大学文学部紀要
巻	60
ページ	1-17
発行年	2010-03-10
URL	http://hdl.handle.net/10114/5889

〈自分の殻〉を破ること

——徳田秋聲『仮装人物』論——

梅 澤 亜 由 美

一、

『仮装人物』は、一九三五（昭和一〇）年七月から一九三八（昭和一三）年八月にかけて、「経済往来」（後に「日本評論」と名称を変更）に連載された。その後一九三八（昭和二三）年一二月に、中央公論社から刊行された単行本『仮装人物』に収録され、その際に細部が書き換えられている。^①周知のように、『仮装人物』は秋聲の妻の死後、弟子、そして恋人として秋聲宅に出入りしていた山田順子との関係を描いたものである。一九二八（昭和三）年にはじまる順子と勝本清一郎の関係を描いた二十三章以後は別として、一章から二十二章までの一九二六（大正一五）年から一九二七（昭和二）年における秋聲と順子の関係は、いわゆる一連の「順子もの」としてすでに作品化されたものでもあった。^②同じ材料への再挑戦、そこには「順子もの」とは違った秋聲なりの狙いがあつたはずだ。

『仮装人物』の冒頭と末尾が照応していることはよく指摘されている。例えば、森英一は〈額縁小説〉という言い方をし、『仮装人物』は〈これを外してしまつたら、全く平凡な作に墮す〉と述べている。^③この〈額縁〉を重視した場合、『仮装人物』一篇のテーマは極めて明白である。まずは作品の末尾、葉子との一連の関係を経た後の庸三が以下のように語られる。

〈その頃庸三はふとした機会から、踊り場へ足踏みすることになり、そこで鹿爪らしい羽織袴の気取りもかなぐり棄てて、軽々しい背広姿になることができた。そして其の時分から、彼女の幻影も段々遠かつてしまつた。〉（三十章）

〈鹿爪らしい羽織袴〉から〈軽々しい背広姿〉へ、古い価値観を持った庸三から新たな価値観を得た庸三へと、その変化が象徴的に表されている。なお、単行本化の際には、それぞれ〈何か拘りの多い羽織袴〉

〈自由な背広姿〉に書き換えられている。そして作品の冒頭、時間的には先の引用よりも後で、現在の庸三が過去を振り返る動機を語る。

「庸三はその後、ふとした事から踊り場などへ入ることになって、クリスマスの仮装舞踏会へも幾度か出たが、或る時のダンス・パーティの幹事から否応なしにサンタクルソオの仮面を被せられて当惑しながら、煙草を吸はうとして面から顎を少し出して、不図マツチを摺ると、その火が髻の綿毛に移つて、めらくと燃えあがつた事があつた。その時も彼は、これから茲に敲き出さうとする、心の皺のなかの埃塗れの甘い夢や苦い汁の古澤について、人知れず其の頃の真面目くさい道化姿を想ひ出させられて、苦笑せずにはゐられなかつたくらゐ、粉飾され歪曲された——或はそれが自身の真実の姿だかも知れない、孰つちが孰つちだかわからない自身を照れくさく思ふのであつた。自身が實際首を突込んで見て来た自分と、其の事件について語らうとするのは、何もそれが楽しい思ひ出になるからでもなければ、現在の彼の生活環境に差響きをもつてゐる訳でもないやうだから、そつと抽出の隅つこの方に押しこめておくことが望ましいのであるが、正直なところ其も何か惜しいやうな氣もするのである。」（一章）

庸三は過去の〈真面目くさい道化姿〉を〈粉飾され歪曲された〉ものでも〈自身の真実の姿〉でもどちらでもいいと思つている。後で述べるように、庸三自身の〈仮装〉意識は『仮装人物』全篇を通して続いている。

るのだが、現在の庸三にとつてそれは意味のないものとなっている。このように、『仮装人物』という作品が、庸三の変化を大枠とした作品であることは明らかである。しかも、〈自身が實際首を突込んで見て来た自分と、其の事件について語らうとするのは〉とあるように、『仮装人物』を語っているのは庸三であるとされている（この語りの問題については後で触れる）。『仮装人物』は、一連の〈事件〉を通して庸三が見た庸三自身の変化、「私」の変化を主軸とした作品なのである。

『仮装人物』の「私」の問題を考えるにあたっては、一九二八（昭和三年）年の「或る秋聲論」における秋聲の発言に注目したい。秋聲は〈順子との事などあつて〉自分の〈人生觀にも大きな変化が来てる〉とし、〈四十代まではどちらかと云へば可なり頑固に自分の殻に閉ぢ込もつて、その為には暗い狭い考への中に生きて来たこともあつた。最近十年間はさういふ殻が割合にとれて来て、怖れとか不安とかいふものがだん／＼無くなつてしまつた〉と述べている。秋聲が閉じこもつていたという〈自分の殻〉とは〈鹿爪らしい羽織袴〉、そして〈さういふ殻が割合にとれて来〉たとは〈軽々しい背広姿〉になったことと対応していると思われる。また、以下のようにも述べている。

「人としての私がよくわかつてゐないといふのは前にも云つたけれども、ある事件とか、人との対立問題に於いて、まるで自分にも待ち設けてゐないやうな性格が現れて来ることがあつて、私はさういふ場合の自分に甚だ妙味を感じることが屢々ある。そして、はたから見れば非常に矛盾したやうに見える事も、自分にはそれ

程感じないでやれることもある。さういふ時に、私は殊に自分を面白く思ふので、私の芸術感興がそこから現れることが度々ある。さういふ矛盾性は、時には二重にも三重にもなつて現れることがあつて、結局、どちらの面がほんたうの自分なのかよくわからないうことになつてしまふ。順子との問題では、それが殊に劇しかった。

このような考えは言うまでもなく、『仮装人物』冒頭の記述と対応している。⁽⁵⁾〈時には二重にも三重にもなつて現れ〉〈どちらの面がほんたうの自分なのかよくわからない〉、さういう「私」の問題に秋聲は〈芸術感興〉を感じている。

「或る秋聲論」は「自画像」というテーマのもと、秋聲が〈評論的に〉「私」を語ったものである。先の引用でも秋聲は〈人としての私がよくわかつてゐない〉と述べていたが、他にも〈自分だけを完全に切り離して批評する〉という〈評論的に〉自分を語ることの難しさを言い、逆に〈作品でなら自分を語ること出来る〉と述べている。〈告白文学〉もまた〈自己主張〉に陥りがちであるが、それでも〈芸術作品では、自己弁護に陥り易い自己批評、自己解剖が割合にその弊に陥らないで巧くゆく場合が多〉く、〈それが作品の尊いところ〉であるのだ。『仮装人物』はとかく複雑に感じられるが、単純に考えれば〈評論的に〉は語りたい「私」を秋聲が作品において具体的に語ったものである。〈自分の殻を破ること、そして〈二重にも三重にもなつて現れる〉「私」、〈評論的に〉は簡潔に述べられていた「私」の問題は、『仮装人物』においてい

〈自分の殻〉を破ること

かに描き出されているのか。本論では、それらを作品の記述から分析し、最終的には「私小説」としての『仮装人物』の意味を考えたい。

二、

明白な〈額縁〉を持つ一方で、『仮装人物』は極めて分かりにくい作品である。その要因としては、後で触れるように錯綜した時間軸の問題が多くあげられてきたが、『仮装人物』においては他にも作品を分かりにくくさせる原因がある。中心となる庸三と葉子との距離感の相違や目的によって、異なる語り方がなされるのである。『仮装人物』は三人称小説の体裁をとっているが、三人称形式の他の「私小説」同様、視点は基本的に庸三に寄り添っている。だが、『仮装人物』の場合、部分によって庸三が知りえないことが多く語られたり、視点人物の入れ替わりが多用されたりと、そこからはみ出す面が多々あるのだ。次の三つの部分に分けると、その特徴が分かりやすい。

第一部は一章から十五章まで、先に引いたプロローグを含み、庸三と葉子の出会いから〈恋愛〉への発展が描かれ、その間に最初の夫松川、本の出版の手配をした一色、装丁をした山路草葉、パトロンである秋本、痔の手術をしたK——博士と、葉子の男性関係が挿入される。第二部は十六章から二十二章まで、葉子の逗子での生活が中心となり、若いブルジョアのマルクス・ボオイ園田と葉子との〈恋愛〉、そしてそこから派生した庸三と葉子のいざこざが描かれる。第三部は二十三章から三十章まで、葉子と清川（吉元）との〈恋愛〉と破局が中心となる。なお、清

川と吉元は同じ人物をさすが、八木書店版『徳田秋聲全集』では、作品全体にわたっての統一はされていない。本論では、地の文では清川で統一し、引用部には（ ）づきで清川と書き加える。第三部が全体の中で異なっていることは対応する「順子もの」がなくなっていることからも納得できるのだが、第一部と第二部もまたその特徴を異にしている。

第一部の特徴は、時間的な錯綜が激しいこと、そして数多く挿入される葉子の男性関係の語られ方の不統一である。『仮装人物』の時間の問題についてはすでに多くの指摘があるが、それらをふまえ大木志門は以下のようにまとめている。まず、『仮装人物』は「作品全体としては大きな時間の移動はなく、細かい回想の振幅を繰り返しながら、特に後半になるほど、ほぼ時系列に沿って恋愛の終局までが語られてゆく」。(細かい回想の振幅)とは、「ある事件が語られる場合、まずその事件の開始または概要が提示され(A)、その事件の発端であるさらなる過去に遡行するかその事件にまつわる別の過去の事件が呼び出されて(B)、それから当該事件に戻ってくる(A)」という傾向をいう。(語り手が思い出すままに語るかのようなA→B→Aの反復)が作品の「基底に流れるリズム」であり、「この往復運動を繰り返しながら作中の時間は螺旋状に進行してゆく」のである。⁶⁾登場人物も「事件」も多い第一部では特にこの傾向が激しいのだが、特定の「事件」を中心とする第二部、三部では自然に時間の錯綜は減っていく。

更に、第一部では葉子の男性関係の語られ方の問題がある。『仮装人物』には、葉子と松川の結婚した頃のこと、あるいは草葉と葉子の生活など、庸三が決して見ることでできないはずの場面がいくつも折り込ま

れている。これらは主に過去のこと、庸三が葉子から聞いた話をもとにその場面を再現していると思われる部分である。まだ、二人が恋愛関係になる以前、葉子が田端で暮らし出した頃、彼女の結婚生活やかつての恋仲だった従兄の話などが(来る度に彼女の口から話された)(二章)とある。また、葉子と初めて関係ができた(郊外のホテルの或る一夜)を思い出す前にも、葉子が草葉との結婚を含めた失敗を(哀情的)に話したことを庸三は思い出している(三章)。

進行中のことについては、葉子は直接庸三に話をしている。作品には秋本やK——博士について、葉子が庸三に話している場面がある。K——博士とのことについては、十五章で二人の関係がいつからか、はじめはどこへ行ったかなど庸三が葉子に聞いている。葉子はそれに答えつつ、ある点には(それをもつと後になれたら、詳しく話すけれど……)と言い、博士の(位置を摺り換えさへすれば、書いてもいい、)と言う。これからは、不都合でないこと、終わったことであれば葉子が庸三にさまざまなことを話していること、更にはそれらは作品の材料ともなっていることが窺える。だが、例えば五章の北海道で破産した松川が訪ねてきたときの場面のように、これにあてはまらないことも多い。ここでは葉子と松川の二人だけのやりとりが語られるが、その内容と葉子の報告とが異なっており、庸三がそれをどう知ったのかははっきりしない。葉子が直接話したとされている部分と、話したであろう部分とに明確な区別はなされていないのである。後に述べるように、葉子の男性関係は作品において大きな意味を持っているが、作品を分かりにくくさせる要因でもある。

第二部では、葉子は庸三と離れ逗子で生活しており園田と《恋愛》関係にある。だが、清川をはじめとした他の男と比べて園田の存在は非常に薄く、葉子の《恋愛》問題は後景に退けられている。かわりに葉子の《恋愛》について庸三が語った新聞記事をめぐる二人のやりとりが中心となり、そこから二人の関係はますますもつれていく。庸三と葉子の関係という点では大団円とも言える部分であり、作品としては二十二章で終わってもよかったのではないかという印象さえ受ける。第二部では、主に二つの特徴を指摘することができる。一つは、庸三の直接的な心情が第一部よりも多く語られること、そしてもう一つは庸三と葉子のこじれた関係を語るにあたつて葉子の目線が多用されることである。後に述べるように、これらはそれぞれに庸三という人物を語る役割を果たす。

第三部では葉子と清川との《恋愛》が話の中心となるが、第一部や第二部のような作品を分かりにくくする要素はほとんどない。葉子との距離が広がった庸三は、第一部、第二部ほどにはその様子を詳しく知ることができず、自らの追跡と葉子の信者である年少の詩人史朗による報告、そして葉子自身の話から二人の《恋愛》の様子を知っていく。逆に言えば、庸三と葉子の関係が浅くなったこの第三部は何のために語られたのが問題である。庸三の変化を中心に『仮装人物』を読む場合、これらの特徴がどういう意味を持ち、それぞれの部分がどのような役割を果たしているかを考えねばならない。

これら三つの部分を貫いているのが、庸三の《仮装》意識である。第一部では作品冒頭の《真面目くさい道化姿》以後も、《仮装》《舞台》といった言葉が多く特にそれが強調されている。第二部、第三部では、

《自分の殻》を破ること

《仮装》や《舞台》という言葉はそれほど使われないが、それぞれの最初にあたる十六章、二十三章には以下のような記述がある。

「一方早く自身の生活に立ち還らなければならぬと云ふ焦燥に駆られながらも、危い断崖に追ひ詰められてゐるやうな現実から何う転身していゝかに迷つてゐた。彼は飛んでもない舞台へ、いつとなし登場して来たことを慚ちながらも、手際のいい、引込みも素直には出来かねるといふ風だつた。」(十六章)

「あれから何のくらの年月がたつたか。日本にも大きな戦争があり、世の中の総てが慌忙しく変化したが、世界にも未曾有の惨劇があり、欧州文化に大混乱を来した。思想界にも文学界にも色々のイデオロギイやイズムの目覚ましい興隆と絶えざる変遷があつたが、その波に漂ひながら独身時代の庸三の青壮年期も、別にぱつとしたこともなくて終りを告げ、二十五年の結婚生活にも大詰が来て、黄昏の色が早くも身邊に迫つて来た。彼は何か踊りたいやうな気持ちに駆られ隅の方で拙い踊りを踊りはじめたのだつたが、素より足取りは狂ひがちであつた。独りで踊りを持ち扱ひ引込みもつかなくて、散々に痴態を演じてゐるうちにも、心は次第に白けて来てゐたが、転身の契機もさう易々とは来ないのであつた。」(二十三章)

どちらにおいても、《舞台》の上で《引込み》がつかなくなった庸三

が〈転身〉の機会を求めている。第一部で強調された〈仮装〉意識は、第三部まで庸三を縛り節目節目で意識されるのだ。これもまた、本論が『仮装人物』を三つの部分に分けた要因である。

「私小説」においては、基本的に「書く私」「書かれる私」という「私」の二重化がある。だが、『仮装人物』においては、事情はもう少し複雑である。葉子と〈恋愛〉をしている庸三と、それらの庸三を〈仮装〉として捉える庸三と、「書かれる私」が更に二重化しているのである。だが、作品冒頭では〈真面目くさい道化姿〉を〈粉飾され歪曲された〉ものでも〈自身の真実の姿〉でもどちらでもいいと思っている庸三が描かれ、この問題は解決している。庸三がこの〈仮装〉意識といかに決着をつけるかが、『仮装人物』の最終的な問題なのである。

三、

第一部においては、「書かれる私」の二重化の構図——庸三自身の自己認識と葉子との〈恋愛〉によって庸三が新たな「私」の面を見出すまで——が語られている。第一部では、第二部や三部よりも〈仮装〉〈舞台〉といった言葉が多く使われている。三章において葉子を〈郊外のホテル〉に誘った際、すでに〈仮装の登場人物は既に引込みがつかなくなつた〉と庸三は感じている。九章では〈やがて庸三もこの舞台から退場するであらう〉とあり、六章でも〈臆病な彼の心は、次第に恥知らずになつて、何うかすると卑小な見えのやうな不純なものも混ざつて、引込みのつかないところまで釣りあげられてしまつた〉とある。このような

〈仮装〉意識は、次のような庸三自身の認識による。(後になつてみれば、今演つてゐることは、其よりもつと醜いものかも知れなかつた) (十章) とあるように、基本的に庸三は自らの〈恋愛〉を〈恥知らず〉〈醜い〉と考えている。このような意識は、子供の目や新聞をはじめとしたジャーナリズムの影響もあるが、基本的には庸三自身の問題が大きい。三章では、庸三は〈恋愛にも仕事にも、ロオマンチックにも奔放にもなれない、臆病にかじかんだ彼〉と評されており、七章にも以下のような記述がある。

「庸三が今まで何のこともなく過ぎて来たのは、人間的の修養が積んでゐるとか、理性的な反省があるからといふのでは決してなかつた。たゞ生ひ育つて来た環境の貧弱さや、生れつきの愚鈍と天分の薄さの痛ましい自覚に根ざしてゐる臆病と、さう言つた寂しい人生が、彼の日常を薄暗くしてゐるに過ぎなかつた。出口を塞がれたやうな青春の情熱が燦り、乏しい才能が徒に掘ちくり返された。彼はいつとなし自身の足許ばかり見てゐるやうな人間になつてしまつた。悪戯な愛の女神が後れ走せにもその情熱を挑き立て、悩ましい惑乱の火災を吹きかけたのだつたが、さうなると、彼にもいくらかの世間的な虚栄や好奇心な芝居気も出て来て、ちよつと引込みのつかないやうな氣持だつた。」 (七章)

生い立ちや生まれながらの〈天分〉の自覚から〈臆病〉になつてゐる庸三は、自ら人生を暗く寂しいものにし〈自身の足許ばかり見てゐるや

うな人間」である。また、十四章ではその頃銀座で「大規模のカフェ」が流行しはじめたこと、そういう「享楽の世界」では「性格的な孤独性と時代の距離」から庸三は「いつもどこかの寂しい姿を自身に見出すだけであつた」と語られている。庸三は、「恋愛」や「享楽」の世界は自分にはふさわしくないという意識を持っており、これらが庸三自身の基本的な自己認識である。そういう庸三にとって葉子と「恋愛」する自分は、本来の自分とは異なる「仮装の登場人物」として認識されている。

このような庸三の自己認識が分かると、庸三が葉子に惹かれる理由もよく分かる。庸三は葉子の話をよく聞く。それらは先に述べたように、『仮装人物』の第一部を分かりにくくする要因ともなっている。だが、たとえそうであっても、葉子という人間についてさまざまな情報をもたらすこれらのことは語られる必要があつたのだ。葉子の話は、彼女独特の色調を帯びていとされる。葉子は「ロオマンズ」が大好きで、「いつの場合でも、ロマンチックな話の種に事欠ない」(十章)。「英国の或る老政治家と少女との恋のロオマンズ」は「彼女特得の薔薇色の感傷と熱情とで、恰かもぼつと出の田舎ものの老爺に、若い娘がレヴユウをでも案内するような塩梅で」(三章)語られ、「翻訳物」の小説や映画は「話上手な彼女の唇から、彼女なりに色づけられ」(七章)で語られる。自身の過去の「恋愛」もまた彼女にとってはそういう「ロオマンズ」と同じなのであり、松川や結婚前に関係があつた従兄と葉子の関係は「何か美しい綾の多い葉子の話振りによると、それは相当蠱惑的なエロマンズで、モオパサンの小説にも似たもの」(九章)となる。葉子は「現実」に何時も美しい薄もの、ベイルをかけて見てゐる」(二十一章)のである。

「自分の殻」を破ること

る。葉子は、「寂しい人生」を送る庸三とはまったく逆の存在である。六章には、「田舎から飛び出して来た文学少女としては、少し手の込んだ夢や熱」がある葉子に、「長年家庭に閉ぢこもつて、人生も既に黄昏近づいたかと思ふ庸三の感情」は「一気に揺り動かされてしまった」とあるが、庸三は葉子のこのような面に惹かれたのである。庸三にとって、葉子とは自らとは対極にある人間、究極の「他者」なのである。先に述べたような庸三の自己認識もまた、葉子という対極にある存在に出会うことで明確に見えてくるものである。

そう考えると、文壇にはさして評価されていない葉子の作品を、庸三が一概に否定しない理由も納得できる。葉子は作中、庸三に持ちこんだ最初の長篇小説の他、婦人雑誌の連載なども書いていとされるが、その作風は三十章で「国民新聞の懸賞小説」に出したとされる「地上の虹」と同じようなものである。庸三によれば、それは「風にも堪へない野の花のやうな其の情趣や感傷の純粹さ」があり、「熱烈奔放な恋愛場景」は「面白い芝居」で「彼女一流の想念の花で份飾」されたものである。十四章では、庸三は葉子の作品について「自分の作風を模倣でもしたら、その人は大変損をするに違ひなく」(教へらるところがあらうとも思へなかつた)と考えている。それでも「彼女に才能がない訳ではない」(い)で「いくらか自身のレアレズムの畑へ引き込んでみるのも悪くはあるまい」と思っている。葉子は作風としても庸三とはまったく対極にある存在で、自分にはないものを持つが故に、他では評価されない葉子の作品を庸三は簡単に切り捨てることもできないのだ。

庸三は、自分とは別世界である葉子の「ロオマンズ」に対して強い興

味を持ち、過去のあるいは進行中のそれを知らずにはいられない。そして、《仮装》と感じながらも自分自身もまたその《ロオマンズ》の一参加者となる。《郊外のホテル》での一夜について、《昨夜葉子はこの恋愛を、何か感激的な大したロオマンズへの彼の飛躍のやうに言ふのだつたが、さう言はれても仕方がなかつた》(三章)とあるが、庸三にとつてそれはやはり《ロオマンズ》への《飛躍》なのである。庸三と葉子の最初の夜は一章で《胸の時めくやうな或る一夜》と表現され、その一夜を説明する三章の文章もまた《赤い花片に似た薄い受唇》《黒ダイヤのやうな美しい目と長い睫毛》といった従来の秋聲の文体とは異なる通俗的な比喩が盛り込まれている。だが、庸三の《ロオマンズ》への《飛躍》である以上、このような表現もまた必要であつた。言わば、庸三は《ロオマンズ》、恋愛譚に憧れるドン・キホーテなのだ。だが、先に述べたように『仮装人物』では、そのような自分を《道化》と感じる庸三がいて、庸三は同時にその批評者でもあるという二重構造を持っていた。

未知の世界へ足を踏み入れた庸三は、《痴態》と感じながらも、《臆病》で《愚鈍》といったこれまでとは違った自分を見出していく。最終的に、庸三は《二重にも三重にもなつて現れる》自身を発見することになる。庸三は《今まで冬眠に入つてゐた情熱が一時に呼び覚まされて来る》(三章)のを感じ、それまで知らなかつた《異性の魅力》に《執著》(七章)する。葉子がいなくなれば必死に探し、七章では《づつと以前に、別れてしまつた妻を追跡して、日光辺の旅館を虱潰しに尋ね》た友人の姿を思い出す。友人とは『別れたる妻に送る手紙』の近松秋江であろうが、以前は《友人の狂気じみた情痴に呆れた》庸三も《機会次第では何

んな役割をも演じかねない》と思うのである。そして、秋本やK——博士といった葉子の男性関係にも激しく嫉妬する。だが、「現実」の《恋愛》は《ロオマンズ》とは違い、《享楽よりも苦悩の多い——そして又その苦悩が享楽でもあ》(九章)るやうなもので庸三を疲れさせる。第一部終わりの十五章において、二人で行つた《郊外のホテル》に葉子が愛人のK——博士を呼んだことで庸三の怒りは決定的となる。そして、庸三は葉子に対する幾重にも錯綜する思いに気づくのである。

《それに庸三は、生活の責任を回避しながら——それには現実に即しえられない彼女の本質的な欠陥があると云ふ理由があるにして——彼女の愛を偷まうとする利己心を、性格の何処かに我知らず包蔵してもゐた。もつと悪いことには、自身の生活に或る程度創がついても、知るだけの事は知りたいたいと思つた。無論それも頭のうへの口実で、彼の気持はもつと盲目的に動いてゐることも、争へなかつた。葉子を通して、彼は微かな触れ合ひで済んで来た、過去の幾人かの女性にも目が開いて来た。》(十五章)

以後、このような葉子に対する《職業心理》(七章)と《愛執》(十五章)を中心とする錯綜した庸三の思いは、バランスを変えながらも庸三の中に同居する。《痴態》を演じる庸三は、《仮装》意識を持つ庸三をよそに多層的な姿を見せるのである。《恋愛》の「現実」を知つた庸三は、かわりに葉子に劣らない自分という興味ある対象を発見するのである。葉子が「他者」であると同時に、庸三自身の中にもまた「他者」として

の要素が秘められていたのである。

四、

第二部では、庸三のさまざまな姿が意識的に語られている。庸三によって自覚される自身の変化と、葉子から見た庸三の変化が中心となっているのだが、前者は刻々と変化しているし、後者もまた多層的な面を見せる。〈二重にも二重にもなつて現れる〉「私」という点ではもつとも迫力のある部分であるが、庸三の「私」は根本的に二重化されたままで両者が変化しており分裂した印象を受ける。

第一部での〈体験〉を経て、まずは庸三自身が〈仮装〉意識の根底にある〈臆病〉で〈愚鈍〉だった自身の変化を自覚するようになっていく。これらの庸三の心情は、かなり直接的に語られている。庸三は、葉子以外の女性や、外国の音楽や文学に新たな興味を持ち、最終的には作家としての〈出直し〉の気運を持つようになる。対女性関係においては、〈女を愛する資格があるとは思つてゐなかつたので、自然恋愛を頭から否定してか、つてゐた〉庸三であつたが、〈何か意地の汚い目が他の女性へと注がれる〉(十七章) ようになっている。庸三は、小夜子においていさん、ハインツエルマンのお玉さん、芳子といった女性を紹介される。小夜子に芳子と〈二戦何う〉と水を向けられた庸三は〈おれも家内のゐるうちは、どちばかり踏んで叱られたもんだが、この頃少し性格に変化が来たやうなんだ〉と受け答えをしている。

外国文化への興味は、まずは音楽や舞踊への関心となつて現れる。第

一部では、庸三は映画よりも歌舞伎を好んでいた。〈長いあひだ見つけて来た歌舞伎の鑑賞癖〉が〈牀にしみついて〉(八章) いるからであり、八章では小夜子と十一章では葉子とその母とそれぞれ歌舞伎を見にいつている。一方、第二部では庸三は、十七章で葉子とデネシヨンの舞踊を見に行く。また、去年のことではあるが葉子、庸太郎とアメリカの舞踊団を見にいづてもいる。〈レコオドの趣味も漸く濁みた日本の音曲が、美しい西洋音楽と入れかはりかけようとしてゐた〉とあるように、庸三は庸太郎が好む西洋音楽にも理解を示すようになっていく。これらは、庸三からすれば〈この年になつて、漸と汗みづくで取り組みつ、ある恋愛学から見れば、まだしも地についてゐる〉ものである。

そして、〈今まで受容れにくかつた〉(二十一章) 外国作品にも新しい興味を持ち、作家としての庸三にも徐々に立ち直りの兆しが現れる。十七章では〈自分を支へ切れないやうに寂しさに打たれ〉ていた庸三が、十八章では〈燃えのこりの生命が燦り出したやうな感じ〉で〈出直ししてみたいといふ欲望〉を感じるようになりその思いはどんどん強くなつていく。二十一章では、文壇の〈新興芸術、プロレタリア文学——さういつた新しい芸術運動の二つの異つた潮流〉の中で、庸三は〈満身に創痕を受けながら、何か窃かにもづむづするやうなものを感じてゐる。〈時とすると生涯の黄昏が既に迫つて来て、此のまゝ、自滅するのではないか〉と思ひながらも〈未だ全く絶望といふほどへたばつてしまつてならないのだと思ふ〉のである。二十二章では、〈今迄の陰鬱な性格に変化が来るやうにも思へ〉〈新規蒔直しには年を取りすぎた嘆きがあり、準備をするには何から手をつけてい、か、今更に見当もつきかねるのだ

つたが、何等かの補足は出来さうに思へるようになるのである。このような庸三の変化は大変明確に示される。《仮装》意識のもととなつていたような《愚鈍》で《臆病》な庸三の姿はすでになく、《軽々しい背広姿》への変化が窺えるのだが庸三はまだそこまでの自覚は持っていない。

庸三が立ち直りつつある一方で、葉子との関係は收拾がつかないほどに悪化していく。そして、これまで庸三に寄り添うことが多かった語りの視点は、第二部では自在に葉子にも寄り添うようになる。第一部で庸三が発見した葉子への錯綜した心情は、第二部ではかわりに葉子の視点から語られる。特に、園田との《恋愛》について庸三が悪く言った新聞記事が出て、その訂正記事を出すなど二人が処理にもめた後はそのような記述が多くなる。これら葉子の目線から語られる庸三は、《そこに憎みきれない狡猾い老人が、いくらか照れかくしに照を撫ぜ／＼坐つてゐた》(二十章)のように、《陰鬱》《愚鈍》であつた庸三とは明らかに異なっている。

《葉子はそれでいくらか安心したやうに、今まで悲痛な色をうかべてゐた顔に微笑の影が上つて、証書を疊んでハンドバックの中に仕舞ひこんだものだつたが、いつ何時何ういふことを書かれるか解らないといふ不安が全く除かれた訳でもなかつた。あの記事以来葉子の目に映るものは二重にも三重にも働き出して来る彼の性格であつた。彼は悪党だとは思へないにしても、安心すべき善人でもなかつた。こんな盲目的な情熱が、この男にあつたのかと驚

かれもし、今となつては或る場合寧ろそれが迷惑でもあり、彼女の身のうへの思ひ設けぬ不幸でさへもあると思はる、ほど溺愛してゐる恋慕の底に、何か知らいつも遊戯とか又は冷い批判とかいふものとは異つた作家氣質といふやうなもので、押し隠されてゐることを、彼女は感じ出してゐた。》(二十一章)

《憎みきれない狡猾い老人》、《善人》でも《悪党》でもなく《二重にも三重にも働き出して来る彼の性格》、《盲目的な情熱》と《溺愛してゐる恋慕》、そして《遊戯》や《批判》とも異なる《作家氣質といふやうなもの》、葉子の目から見ても庸三はかなりの変貌を遂げている。十九章には、《庸三といふ老年の文学者が、蔭で葉子を操つてゐる、何か狡猾な背徳漢のやうに思はれてならなかつた》という黒須の目線があり、葉子の目線と同様の役割を果たしている。なお、同じ場面を描いた「順子もの」の『暗夜』⁷⁾では、《二重人格三重人格》は庸三にあたる彼の意識として語られていた。

《彼は一昨夜からのことが、まるで他所の出来事か何ぞのやうに思ひ返されたりした。余りに色々のことに出逢ひすぎて来たせいかも知れなかつた。世間のいはゆる道徳とか感激とかいふやうなものから、一切逃避してゐる心持かも知れなかつた。説明しても説明しきれない複雑さや矛盾や融合やがそこにある以上、そつとしておいた方がいゝ、といった諦めの心がそこにあつた。首を突込んで考へるのも怖いことであつた。そんな気が誰にわかつてもら

へる訳のものでもなかった。彼は狡くとぼけてゐると思はれても仕方がなかった。二重人格三重人格、それでも可い訳であつた。』

〔暗夜〕

ここでは、〈説明しても説明しきれない複雑さや矛盾や融合〉も〈二重人格三重人格〉も、彼自身によつて〈仕方がない〉ものとして否定的に捉えられている。どちらにしても、『仮装人物』冒頭で示されるような庸三の多層性が肯定される様子はまだ見られない。

葉子の庸三に対する目線は、第一部にもいくつかあつた。六章で娘の留美子と庸三宅で暮らしはじめた際には、〈今その子供と一緒に庸三の家に落ち着いた彼女は、忽ちにして其処に別の庸三を見出した〉とあり、十一章には〈同時に葉子の体を独占的に縛つてゐるかのやうに思へる庸三がひどく鈍感で老獪な男のやうに思へて、腹立しくもなるのであつた〉とある。これらもまた、基本的には第二部と同様の役割を果たしているのだがやはり少ない。また、〈葉子はいつかそんな事を口にしてゐたが、それは自分が逃げる時のことを考へてのことなのは勿論であつたが、一度失敗もしてゐるので、この年取つた男にかゝつては、迂闊なことも出来ないと兼々用心してゐるに違ひなかつた〉(十四章)のように、葉子の様子から庸三がその心中を推測するような部分もあり、葉子の視点としてはいまだ未分化であつた。だが、第二部では葉子の目線がより効果的に利用され、大きな意味を持つようになってゐる。第二部においては庸三は葉子によつて観察される存在でもあり、葉子の視点は「他者」としての庸三を語る役割を果たしている。庸三による語りという点から見

れば明らかな逸脱であるのだが、これらは必要なことでもあつた。それらは「書く私」、語る庸三の視点が投影されたものなのである。

また、第二部では葉子から庸三へ、あるいは庸三から葉子へと視点が切り替わる場面がいくつか見られる。

〈この先き庸三との関係が何のくらゐ続くものかは、葉子にも見当がつかなかつたが、何んな場合にも——たとひ彼女と第三者とのあひだに、更に新しい恋愛が発生したとしても、師は師として崇めると同時に、庸三も苦しいなりに兎に角祖父としての立場で愛情と保護を加へることを惜しまないであらうことを期待したのだつたが、結果があんな風になつた以上、当分庸三を擬装の道具につかふより外なかつた。彼女は腫れものに触るやうに庸三を取扱つたが、ぶす／＼燦る憎悪の念を何うすることも出来なかつた。庸三も最後は潔よくするつもりだつたし、ちやうど昔から女には愛せられないやうに生れついてゐるものと、自分で決めてゐたと同じ自己否定の観念や、年齢や生活条件もそれに加算してのうへで、歩を決めてゐたのであつたが、窃つと一言二言批判がましいことを、談話のあとで口にしたことが、葉村氏の筆であんな風に誇張されてみると、葉子と差し向かひにゐても、卑劣な腸を見透かされるやうで、いつも苦り切つたやうな顔をしてゐるより外なかつた。〉(二十章)

先に引いた二十一章の引用も葉子の内面を語つた後、〈庸三も証文を

取られたことは、ちよつと不愉快であつた。(中略) 仮定的にもせよ、当座の思ひつきにもせよ、金で彼を縛らうとしてゐる彼女の気持も愛らしいものとは思へなかつた」とすぐに庸三の内面が続いている。これらもまた『暗夜』では、〈たゞ彼自身と彼女と劇しい触れ合ひから、曾つてはもう痛切に感じあへなかつた色々のものを見せ合つたゞけであつた。彼との触れ合ひで、外の男との触れ合ひは見ることも出来なかつたものが出て来たり、彼女との触れ合ひでまるで今までの彼とちがへた彼自身が出て来たりした〉と、庸三にあたる彼自身の感慨として簡単に語られていた。『仮装人物』では、ここでも語りの視点から逸脱しても庸三と葉子の互いの心情がより具体的に見える方法が選ばれている。『仮装人物』第二部においては、バランスの差はあれど庸三も葉子も観察し観察される対象なのである。

このように庸三自身が自覚する〈出直し〉への意志、主に葉子の目線で語られる庸三の多層性、そして観察し観察される対象としての庸三と、第二部ではさまざまな庸三が意識的に語り出されている。だが、そのために多くの工夫あるいは逸脱がなされる一方で、乱反射する庸三を庸三自身がどう捉えているかが示されることはない。〈仮装〉意識もいまだ解決されていない。

五、

二十二章までにおいて、〈仮装〉意識の根底にあった〈臆病〉だった庸三はすでに変化を遂げた。また〈痴態〉を演じる庸三は更に広がって

いる。だが、庸三が〈鹿爪らしい羽織袴〉から〈軽々しい背広姿〉になるためにはいまだ足りないものがある。庸三は古い「私」、自らを〈仮装〉として否定する自身から解放されねばならないのである。第三部において、清川と葉子の〈恋愛〉を観察しながら庸三は自分の〈ロオマンズ〉に対する〈幻想〉を壊していく。そして、結果的には自分が思う自分自身もまた〈幻想〉にすぎないことに気づくことになる。庸三から見えて、清川は葉子に似合いの男である。二人の〈恋愛〉を、庸三は〈環境と年齢と柄合ひから見て、二人に取つて極めて自然の成行き〉であり、〈あの男なら旨く行くに決まつてゐる〉(二十三章)と思うのである。このような庸三の感慨は十二章でもすでに表れていた。

「あれなら本当に葉子の好い相手だ。」／庸三はそれを口にまで出した。ちやうど文壇に評判のよかつた「肉体の距離」といふその青年の作品が、さうした葉子の感情を唆るにも、打つてつけであつた。絶えず何かを求め探してゐる葉子の心は、既に娘の預り主である踊りの師匠に密かに叛逆を企て、ゐるに違ひなかつたが、庸三の曇つた頭脳では、そこ迄の見透かしのつく筈もなかつた。仮令ついたにしても、病人が好い博士の診断を怖れるやうに、彼は出来るだけその感情から逃避するより外なかつた。結婚することとできないのに、始終風車のやうに廻つてゐる葉子のやうな、若い女性の心を、老年の、しかも生活条件の何も彼もが好くないだらけの、庸三のやうな男が、永久に引留めておける理由もないことは、運命的な彼の悩みであつたが、また悽愴なこの恋愛が何

時まで続くかを考へる度に、彼は悲痛な感じに戦慄した。看る看る彼の短かい生命は刻まれて行つた。しかし何うしてみやうもなかつた。(十二章)

ここでは葉子に似合いの清川に対し、〈老年〉で〈生活条件〉の悪い自分が比較されている。三で見えてきたように、庸三は常に自分にコンプレックスを持ち、〈ロオマンス〉にふさわしくない人物として自分を感じている。庸三が第二部で自身の〈立ち直り〉の兆しを感じながらも、なお葉子を追つたのはその相手が庸三が〈好い相手だ〉と感じていた清川だったからではなかつたか。自分の〈ロオマンス〉は惨憺たるものであったが、葉子と清川とは違うかもしれないのである。〈庸三の想像では、吉元(清川)の生活は相当豊富なもの、やうに思へたし、今度の恋愛事件では、可也な金を家から持ち出したに違ひないと思つてゐた。庸三から見ると、二人の幻影は、それ程にも豪華に見えるのであつた〉(二十四章)とある。庸三が無意識のうちに抱いている〈恋愛〉は、若い美男美女による金銭の心配もない〈絢爛〉〈豪華〉なものなのであり、自分はことごとくその条件に満たないのであつた。第一部でも庸三は、松川や秋本の容姿の良さにこだわっていた。

しかし、「現実」は違っていた。史朗によれば清川は生活のために本を売り、葉子が言うには女中もいないので家事は葉子に押しつけられがちになっている。以前はかわいがられていた留美子も今ではすっかり邪魔にされ、庸三から見た葉子は〈生活に汚れ〉ている。

〈自分の殻〉を破ること

〈庸三は悵鬱い自分の恋愛とは違って、彼等の恋愛をすばらしく絢爛たるものに評価し、窃かに憧憬を寄せてゐたのだつたが、合理的な吉元(清川)の遣口の手堅さを知ることが出来たと同時に、葉子の色もいくらか褪せて来たやうな感じだつた。〉(二十七章)

庸三は二人の〈恋愛〉に抱いていた思いが、自分の〈幻想〉であつたことを理解する。〈結局は吉元(清川)によつて、彼の幻想も微塵に碎かれたと言つてよかつた〉(三十章)のである。なお、単行本化にあつては、〈清川との恋愛によつて〉と書き換えられ、〈恋愛〉という言葉が強調されている。〈恋愛〉に対する自分の考えが単なる思い込みであつたことに気づかされた庸三は、同時に自分自身に対する認識もまた同じやうなものにすぎないと気づいたのではないか。庸三は、〈陰鬱〉な「私」という自己像でいつの間にか自分を縛っていた。庸三がそういう〈自分の殻〉を破るためには、思い込みの世界を壊すことが必要だつたのだ。それに気づいて、庸三はようやく〈鹿爪らしい羽織袴の気取りもかなぐり棄て、軽々しい背広姿に〉なることができたのである。一方、庸三から見た葉子の方とはというと、最後まで変わっていない。

〈それにたとひ其が何んな家庭であるにしても、葉子をおくのに相応しいものではなかつた。彼女の逃げようとしてゐるものは、いつも求めてゐたものであつた。望みはさう大きいものでもないものでもないながらに、手に取つた瞬間現実の厭な匂ひが鼻につくのだつた。彼女には自身を支へる骨格がなかつた。〉(二十九章)

《夢遊病者》(二十二章)である葉子は、最後まで「現実」に夢想を抱くことをやめていない。懸賞小説への夢が破れた後の葉子は、渋谷に若い人たちのサロンとなるような書店を開いている。そこを手伝う《おでんやの苦学生》から話を聞いた庸三には、《彼女の無軌道振も本格的になりさうに見え》る。単行本では、《彼女の憧憬的となつてゐたコレット女史を逆で行つたやうな巷の生活が発展しさうに見えた》とある。庸三のこともまた、葉子の中ではいつか過去の《ロオマンズ》の一つになるであろう。「地上の虹」は、すでにそれを暗示している。庸三という「他者」と出会い一連の《体験》を経たにもかかわらず、葉子の方は変わらない。「私」の持つ《幻想》は、壊しがたいものであるのだ。

庸三が《鹿爪らしい羽織袴》をなかなか脱ぎ捨てられなかったように、思い込みによって作られた「私」やイメージの世界は思いの外強固である。だが、「私」も「現実」もその思い込みをときに越えて、さまざまな姿を見せるようなものである。なにを本当とするかは見る人次第なのであり、実はよく分からないものなのだ。にもかかわらず、人はなかなか《自分の殻》を手放せない。「私」を狭く閉じ込めているのもまた、「私」自身なのである。庸三の《仮装》意識もまた、自分の思い込みの一つにすぎなかった。実際の庸三は、ここまで見てきたように新たなものに関心を持ち刻々と変化し、多層的な面を見せるような存在であった。「私」とはしよせん多層的に変化していくもので、常に《仮装》にすぎないとも言えるのだ。そして、庸三は《自分の殻》を壊し、これからもさまざまな姿を見せるであろう「私」の自由さを選んだのだ。『仮装人

物』においては、思い込みの「私」、《仮装》意識に伴っていた古い「私」が破壊されることで「私」は逆説的に統合される。後には多層的な「私」と、そのような「私」を認識する「私」だけが残る。「私」次第で、「私」は「私」を自由にすることもできるのだ。『仮装人物』においては、庸三は語り手である一方で、時に観察される対象ともされていた。それらは「書かれる私」の二重化や語りの視点の不統一をもたらししたが、庸三自身にそのような自身を「他者」として見つめる視点があつたからこそ、このような地点に辿りつくことができたのだ。

六、

ここまで見てきたように、『仮装人物』に描かれているのは「私」というものの多層性であり、これまでそう思ってきた固定された「私」を壊しそれらを肯定することであつた。その意味で『仮装人物』は「私」を問題とした作品だと言える。だが、部分によって庸三が知りえないはずの葉子の行動がたくさん書かれたり、葉子の目線が自在に組み込まれたり、その書き方は基本的に作者である主人公に視点が寄り添う「私小説」とは異なつたものでもある。それでも、秋聲にとって『仮装人物』はまぎれもなく「私小説」であつた。

『仮装人物』が連載された一九三五(昭和一〇)年には、秋聲は「私小説」における《私の裏づけ》《自分の体験》の持つ強さを強調している。「僕はかう思ふ」では《しかしいろいろ自分が体験して来るといふと、やはり自分の体験が相当尊いもんだと思はれる》⁸⁾と言ひ、「私小説

是認 阿部氏に対する答へ」では〈私小説でなければ、小説としての意味がないと私は思ふんです。私の裏づけのない昔風の物語などは、それが客観小説であればだけ意屈だと思へるのです〉とまで述べている。⁹⁾

「順子もの」の『和む』には、葉子にあたる愛子に〈現実をそのまゝ、取扱つたものは、興味が無いといふ人がありますね〉という言葉に対し、庸三にあたる彼が〈現実の人生も人間の頭から想像されたものぢやないか。芸術家が本や机の上で創造したものよりか、遙かに偉大な創造力をもつてゐるものが此の人生なんだと、僕は信じてゐる〉¹⁰⁾という場面がすでにあった。先に引いた『暗夜』における〈二重人格三重人格〉の「私」同様、「順子もの」の終盤ではすでに秋聲の中に『仮装人物』執筆につながる思いがあったことが分かる。

『仮装人物』連載開始の前年である一九三四（昭和九）年、秋聲は「文芸雑感——正宗氏へお願ひ」¹¹⁾において以下のように述べている。この文章は、正宗白鳥が秋聲の『二茎の花』を批判したのに対し、秋聲が答えたものである。¹²⁾そのためか、秋聲の白鳥に対する言葉も手厳しい。

〈独り不思議なことには、さういふ正宗氏の作品が、少しも客観的でなければかりか、正宗氏自身の苦しい厭世哲学が、何の作品の何の人間にも代弁されてゐるばかりで、生きた人間が一人も出てこないことである。「藪睨み」といふ題は小説もさうだが、題だけ見ても、正宗氏の主観のスタンプが捺されたもので、最近の「陳腐な浮世」といふに至つては、その極端なものである。その他の作品においても、大同小異で、客観どころか、どれも是も主観小説

〈自分の殻〉を破ること

中の主観小説であり、私小説の変形である。〉

秋聲は白鳥の作品には、〈正宗氏自身の苦しい厭世哲学が、何の作品の何の人間にも代弁されてゐるばかり〉だと述べる。興味深いのは、秋聲が白鳥の作品を〈主観のスタンプが捺されたもの〉と形容していることである。¹³⁾というのも、このような〈主観のスタンプが捺されたもの〉は、「私小説」においては白鳥の作品だけに限らないからである。というよりも、一般的には「私小説」は〈主観のスタンプ〉によって成立しているとも言えるかもしれない。白鳥の場合はその〈主観〉が〈苦しい厭世哲学〉であるわけだが、〈哲学〉の前の形容を変えれば秋聲が言っていることは他の「私小説」作家たちにもあてはまる。例えば、葛西善蔵であれば「閉鎖的な芸術家哲学」という言い方ができるだろうし、他の多くの「私小説」もまた、「事実」や「私」を見る「私」のものの見方を固定する方向にある。本来不透明な「私」や「事実」を描くためには、作品世界を統一する「書く私」のものの見方こそが重要なのである。そしてそこにこそ、それぞれの作家の「思想」が現れるのであり、読み手の方もそこを鑑賞する。だが、秋聲の興味はそういう方向へは向かわなかった。秋聲は、多くの「私小説」とはまったく逆の方向を目指したのである。白鳥に対し、秋聲はまた次のようにも述べている。

〈正宗氏が非人間的な主観の星に立てこもつて、人を足下に寄せつけまいとしてゐるのも、正宗氏の人間性の強さから来る厭人思想の致すところで、それが長いあひだ一つの型になつてしまつて、

今は寧ろ非人間的な一つの抽象觀念に封じこめられようとしてゐる。早晚そこから脱出するかも知れない。しないかも知れない。人間は内面的だけでは、なかなか自己を破壊しにくい。正宗氏は實際生活において、惻巧すぎるし、用心ぶかいから、破綻もみせないかはりに、内攻してゐる人間性の苦しみは、恐らく私などの比ではあるまいと思ふ。事によると正宗氏は私などより遙かに氣の毒な人かも知れないのである。〕

秋聲は、白鳥について（一つの抽象觀念に封じこめられようとしてゐる）とする。そういう〈自己を破壊しにくく〉〈内攻してゐる人間性の苦しみ〉に囚われた白鳥は、自分より遙かに氣の毒な人かも知れない〕と言う。庸三もまた、〈自分の殻〉をなかなか破れずにいたし、葉子のように破ることのできない人間もいる。〈自分の殻〉は破りがたいものであるが、それを壊したときにはもつと自由な「私」の世界が開けるのである。そして、『仮装人物』で描かれたような思い込みの「私」から解放されたとき、秋聲は「私小説」の枠組みからも同時に解放されたのではなかったか。「私」からの解放は、同時に「私小説」観からの解放でもあったのだ。一連の〈体験〉から得た「私」の問題を描き出すためには、たとえ全体が不統一になつてもそれぞれに合わせた書き方が必要だった。〈遙かに偉大な創造力をもつてゐる〉〈人生〉、〈自分の体験〉に与するには、また別の工夫が必要だったのである。そのためには、部分的な視点の移り変わりや全体の不統一といったことはたいした問題ではなかった。〈体験〉から得たことを存分に描き出すためには、小説のお

約束ことはどうでもよいことだったのである。

秋聲が辿りついた『仮装人物』という「私小説」は、本来不透明な「私」や「事実」を描く「私小説」が辿らねばならない方向でもあった。それは「私」の〈主観のスタンプ〉、あるいは「思想」によつて作品世界を描き出す従来の「私小説」とはまた別の面白さを持っている。秋聲が発見したのは、新たな「私小説」の醍醐味だったのであり、それは脱「私小説」としての「私小説」として結晶したのである。

注記

- (1) 雑誌掲載の詳細、本文の異同については、八木書店版『徳田秋聲全集』第十七巻の『仮装人物』「解題」「主な異同」に詳しい。なお、本論の『仮装人物』の引用についてもこれによつてゐる。また、本文の異同については、丸山宏之『仮装人物』論（『論考徳田秋聲』一九八二（昭和五七）年、桜楓社所収）に「校異」が付されている。
- (2) 松本徹は、『徳田秋聲』（一九八八（昭和六三）年、笠間書院）所収の「現場」で書く——『順子もの』の諸作品』において、『順子もの』を『神経衰弱』（『中央公論』一九二六（大正一五）年三月）から『日は照らせども』（『文藝春秋』一九二八（昭和三）年四月）までの二十九篇としている。なお、八木書店版『徳田秋聲全集』第十六巻「順子もの」の諸作品』でも、同様に二十九篇があげられている。
- (3) 森英一「額縁小説」（『秋声から美英子へ』一九九〇（平成二）年、能登印刷・出版部）。森は、作品末尾から冒頭の庸三の意識の変化について、「部屋、解消」をはじめとした諸作品を補強材料に裏づけている。
- (4) 『或る秋聲論』（『新潮』一九二八（昭和三）年三月）
- (5) 大木志門は、『自然主義』を「莊嚴」にすること——徳田秋聲『仮装人物』論序説（『立教大学日本文学』二〇〇二（平成一四）年二月）において、『或る

秋聲」論他、横光利一への関心から当時の秋聲が〈心理の重層性に並々ならぬ関心を抱いていた〉とし、それが『仮装人物』冒頭の記述に前面化したと指摘している。

- (6) 大木志門「徳田秋聲『仮装人物』——「私小説」＋「モダニズム」」(『国文学解 釈と鑑賞』二〇〇八(平成二〇)年二月)
- (7) 『暗夜』(『週刊朝日』特別号、一九二七(昭和二)年六月一日)
- (8) 『僕はかう思ふ』(『現代』一九三五(昭和一〇)年三月)
- (9) 「私小説是認 阿部氏に対する答へ」(『読売新聞』一九三五(昭和一〇)年五月二六日)
- (10) 『和む』(『中央公論』一九二七(昭和二)年七月)
- (11) 「文芸雑感——正宗氏へお願ひ」(『新潮』一九三四(昭和九)年一〇月)
- (12) 正宗白鳥の「作品と批評」は、『読売新聞』一九三四(昭和九)年七月二四、二五日発表。秋聲の「茎の花」は、『文藝春秋』一九三四(昭和九)年七月に発表されている。
- (13) この点については、論者は小論「徳田秋聲」(『私小説研究』二〇〇七(平成一九)年三月)において簡単に述べたことがある。